

5/16/10 「不思議さへの感動」 詩篇 8

16世紀のフランスの思想家パスカルは、『パンセ』(思索)という題の本を書いたことで知られています。彼はその中で人間が人間らしくあるための不可欠な条件として、自分が今ここに生きているという動かしがたい事実深く心を揺さぶられることを挙げています。

自分は生かされているという不思議さへの感動、これこそ人間らしい人間の必須条件だ、と言うのです。生かされているという不思議さへの感動、これこそ現代の私達が喪失しつつあるものではないでしょうか。現代人の多くは、自分が今生きているのは自然の偶然であり、それを不思議に思うなどは妄想に他ならないと思っています。自分は生かされているのだという意識は、人生の敗残者の戯言であって、人生の勝利者には有害である。自分を生かしてくれる聖なるものに感謝するなどという考えは、人生をのしていくためには障害物でしかなく、自己を誇示して他者の上に君臨する開き直りの精神こそ大切なのだということになります。

しかし聖書は、この現代人の自己中心的で浅薄な人間理解を否定し、パスカルの人間理解を強く支持しています。その例として詩編8編をひもといってみましょう。

この詩人にとって、宇宙と生きとし生けるものすべては、神の思いが込められた神の愛する被造物です。「主よ、わたしたちの主よ。あなたの御名は、いかに力強く、全地に満ちていることでしょう。あなたの天を、あなたの指の業をわたしは仰ぎます。」

詩人にとって人間は神の被造物の中で最高のものです。「そのあなたが御心に留めてくださるとは、人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう、あなたが顧みてくださるとは。」

つまりこの詩編の詩人にとって、私が、あなたが今現在生きているというのは、偶然ではないのです。それは、神の愛と慈しみの結果なのです。

人間はその創造主たる神に背を向けて、あたかも自分が世界の中心であるかのように生きている、と聖書は語ります。この神の忘却と自己中心主義、これが人間の最大の問題だと言うのです。

自分のことだけを考え、自分を越えた聖なるものに無関心な現代人が陥る何とも言いがたい寂寞感、孤独感、そしてわびしさは、聖書によれば、生かされているという不思議さへの感動の喪失が原因なのです。

しかしそのような人間に希望が与えられている。人間は変わることができる。これが聖書のもう一つの主張です。

イエスの福音はそれを明白にしています。神は天におられるだけではないのです。神はナザレのイエスという一個の人格として私達の只中に降りて来られた、と新約聖書は主張します。

神は遠くから「頑張れ、頑張れ」と声をかけてくださるだけではないのです。神は主イエスにおいて私達の悩みや痛みを、神ご自身の悩みや痛みとし、私達の苦しみを私達と共に痛み、私がついているから何があっても大丈夫だと言って私達を支えてくださるのです。

パスカルが言うように、私達は私達を越えたものによって生かされているのです。より詳しく言えば、神の愛と慈しみによって生かされているのです。

主イエスが共におられるから、耐えられない苦しみはない。主イエスが共におられるから、いかなる苦難も私達を絶望の淵に追い込むことはない。イエスがおられるから、自分だけでなく、他者の幸せを考えて生きることができる。この確信こそが私達の生き甲斐と希望の源です。

以前私は水野源三という方の詩をこの講壇からご紹介したことがあります。水野さんは幼い時に脳性麻痺を煩い、一生を自宅の6畳間に敷かれたふとんの上で過ごした方です。以下の詩は彼が亡くなる数年前に残したものの一つです。

「町の女子高生が見舞いに来てくれた。

寝たきりの僕のやせた手を涙ぐみながら握手してくれた。

僕は彼女の後ろにイエス様を見た。

私がいるよ。一緒にいるよ、という声を聞いた。

僕の心は洗われた。きれいになった。僕は生かされている。

素晴らしい恵みだ。生きていてよかった。」

私達も、「僕は生かされている。素晴らしい恵みだ。生きてよかった」と言って生きることが赦されているのです。そのことを胸に刻み付けながら、この一週間を生き生きと、そして正々堂々と生きていこうではありませんか。